

もう忘れたかも知れませんが、「現代社会」の教科書には「世界三大宗教」という項目があります。三大宗教とは仏教、キリスト教、イスラム教のことで、それぞれの創始者としてゴータマ・シッダルタ、イエス・キリスト、ムハンマド（632 没）となっています。ゴータマは紀元前6世紀の人で、イエスは紀元1世紀の人だから、キリスト教は仏教より後に生まれたように見えます。確かにイエスはゴータマよりも後世の人ですが、イエス・キリストは突然紀元1世紀に現れた人物ではないのです。イエスの誕生には長い準備期間があったのです。ではいつに遡るのでしょうか。

キリスト教の聖典は聖書と呼ばれます。ユダヤ教とキリスト教は聖書を「神の靈感によって人間が書いた本」と信じます。聖書には旧約聖書と新約聖書があります。「旧約の神と新約聖書の神は別物」と言う人がいますが、それは浅薄な意見です。キリスト教は両者に矛盾はなく「新約聖書は旧約聖書に照らして読む必要がある」と教えます。換言すれば、旧約聖書は隠れた仕方でイエス・キリストを準備していると言ってもよいというわけです。そしてその始まりは世界の創造にまで遡るのです。

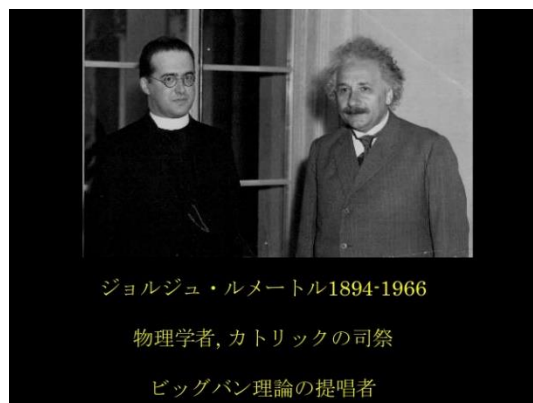
旧約聖書の最初の書物は『創世記』と呼ばれるもので、その最初の3章は天地万物の創造が描かれています。皆さんは、「あれは神話だろう」と思われるかも知れませんが、確かにその文体には神話的な叙述があり、今で言う歴史書とか、ましてや自然科学の書物ではありません。しかし、キリスト教は創世記も神が自分を表した啓示の書であると教え、特にこの最初の3章には世界と人間について重要な基本的教えが含まれていると考えます。ただ、『創世記』にはまだ漠然とした部分もあり、それが後に書かれた旧約聖書の他の本や、なかでも新約聖書で示された教えによってはっきりします。キリスト教では「新約が旧約を明らかにする」と言われます。

さて、聖書に語られる天地創造や人間の創造については、現代の科学が教えることとまったく異なるように見えます。しかし、ここで聖書が宗教の書物（神と人について教える書物）であって、科学の書物ではないことを確認しなければなりません。聖書は、科学的に宇宙や人間がどのように生まれたのかを説明するのではなく、自然現象の裏に神の手があったことを教えたいのです。このことは科学でも否定できません。科学と宗教の教えに矛盾がないことは、ビッグバンの仮説を発見したのがルメートル（1894~1966）というカトリックの司祭であったことを見てもわかると思います。

それでは、『創世記』の教える重要な教えとは何かを見ていきましょう。

1) 天地万物の創造

最初の教えは、創世記の冒頭に現れる「はじめに神は天と地を創造された」という文です。ユダヤ教とキリスト教の伝統は、この文が「神は無から（何の材料も使わずに）万物を創造された」という意味だと理解してきました。我々日本民族の神話（古事記）では、まず「天と地が別れた」（天地開闢）と言います。つまり、天地は一つになっていたのですが、ともかく神々の出現の前から、最初から天地はあったのです。そしてそこから神々が生まれてくるのです。ギリシア神話も最初から物質（形の定まっていなカオス）があったという点で同じです。ところが聖書は、最初は神だけがあり、この神が万物を創造したと言います。「創造する」という言葉（ヘブライ語で bara）は聖書では神にしか使われていません。そして、この神はただ一体の神であって単数で表されています。（ただし、



ジョルジュ・ルメートル 1894-1966

物理学者、カトリックの司祭

ビッグバン理論の提唱者

人間を創造する際「我々に似せて人を造ろう」と複数で現れます。これについては後で説明します)。

ところで、この無からの創造ということからは、多くの結論が引き出されます。無から創造されたなら、創造された物（被造物）はすべてを創造主に依存していることになります。人間が何かを作るときには、すでに存在する材料を使ってそれに新しい形を与えます。その場合、できあがった作品は作者が消えても存在し続けます。しかし、無から創造された物は、その存在と動きもすべて作者に依存しているのです。私たち自身のことを考えると少しそれがわかります。私たちが今存在しているのは、私たちの意志の力によるものではありません。もし意志の力によるなら、睡眠中は意識がないので、存在を止めることになるはずですが、世間でときどき言われるように「私たちは生かされている」のです。でも「もしそうなら、一体何によって生かされているのでしょうか」。世間ではこの問題には深入りしませんが、聖書は「神によって」と教えるのです。

旧約聖書の別の書物『知恵の書』は、「あなた（神）が望まなければ、何も存在し続けることはできなかった」（11章、25）と言います。神は万物を造りたかったので創造されたというわけです。これに対して古代の哲学者たちの中には、宇宙は神から流出してきたとか、必然的に生まれたとか言う人もいます。でも、私たちが存在する必然性はあるのでしょうか。この世界と私たちが神に望まれたので存在しているというのは、慰めになる教えではないのでしょうか。

『創世記』の第一章では、神は6日をかけて順番に創造の業を続けていく様子が述べられています。最初の三日間では宇宙を個々の領域に分けるという分離の作業、後の三日間ではそれぞれの領域に動植物などを住ませるように。そして、三日目からその仕事が終わるごとに「神はそれを見て善しとされた」とあり、創造の業を完成したときには「神はご自分がお造りになったすべてのものをご覧になった。それは極めて善かった」と結ばれています。

このような叙述は何を教えているのでしょうか。一つは、太陽も月も星も、また動物も植物もすべて神の作品に過ぎず、神ではないことが明らかにされます。これは古代のオリエント世界では、太陽や月や星、あるいは動物などが拝まれていたので、神はユダヤ人にそのまねをしないように諭したと考えることもできます。ともかく、この教えは当時ではとても特異なものでした。

もう一つの教えは「存在するものはすべて善い物であった」ということです。最初は悪がありませんでした。現在の世界に悪があるのはその後の出来事のためだ、と言うのです。これについては後で説明します。今でも、この世界には悪や欠陥があるにしても、根本的に善であって、秩序と調和があるとキリスト教は考えます。「でも、ウイルスや病原菌や毒など、あるいは災害のように人間に害をなすものもあるではないか」と目ざとく指摘する人もいるはず。確かに今では自然が人間に害を与えることがあるが、それは例外的な場合で、普通は人間を助けてくれませんか。そのうえ人間にとって有害というのは無条件にではなく、条件が異なれば役に立ちます。毒は薬になるし、災害は大きな目で見ると地球の発展の営みとも言えます（無論、災害の害を最小限度に食い止める努力は必要です）。また面白いことに、この世に存在するもので「何の役にも立たない」ものはありません。昔は役に立たないと思われていたものが、科学技術の進歩によって、貴重な素材になることは最近特によく見られます。「神が創造された物はすべて善い」なら、この世界に無駄な物はないはずですが。

天地万物の創造の話は、神が7日目に「休まれた」と締めくくられています。これは「休息」の大切さを人間に教えています。仕事は大切だが、人はただ仕事をするために生まれてきたのではない（マルクスは人間の本質は労働だと言います）。神を礼拝し、家族や友達と過ごすこと、芸術やスポーツの活動することも欠くことのできない活動と言うわけです。みんなもこのことを考えて下さい。